

「『てんぷら』の生まれ故郷は？」指導資料

【題材の概要】

「外来語」は、高学年の児童が身近に使われている外来語の由来に興味をもちながら、かつ「Where are ~ from?」の表現に必然性を感じながら学習できる題材である。

本時では、児童が身近に使われている外来語がどこの国から入ってきたのかを予想し、コミュニケーション活動を通してその答えを調べる。そして、我が国が昔から世界中の国々と交わりながら互いに影響を与え合って生活してきたことを理解することができる。

【国際理解との関わり】

児童は、我が国で使われているたくさんの外来語の由来から、我が国は世界中の国々と交わりながら互いに文化面で影響を与え合って生活してきたことを知る。

このことを通して児童は、我が国の言葉に興味・関心をもち、それらを尊重する心情や態度の素地を培っていく。

【各教科等との関連】

社会科・・・国土の位置、我が国と関係の深い国の生活、我が国の歴史

国語科・・・目的や場に応じた適切な言葉遣いで話す

【題材内容との関連事項】*学校の実態に応じて活用してください。

<外来語の例(どこの国から来た言葉か)>

ドイツ語	ガーゼ、カルテ、ワクチン、プレパラート、エネルギー、アイスバーン、ゲレンデ
フランス語	アンティーク、アトリエ、クレヨン、ズボン、メニュー、ピーマン、マロン
オランダ語	ゴム、ガス、コルク、コンパス、シロップ、スコップ、レンズ、ビール
イタリア語	ダカーボ、ソロ、フィナーレ、ブラボー、パスタ、ピッツァ、ティラミス
ポルトガル語	カステラ、金平糖、パッテラ、カボチャ、合羽、襦袢、ビードロ、シャボン
スペイン語	プラザ、カルデラ、カスターネット、ポンチョ
ロシア語	イクラ、ピロシキ、カンパ、セイウチ、ペチカ、コンピナート、ウォッカ
中国語	タンメン、チンゲンサイ、メンマ、チャンポン、ラーユ、リーチ、
韓国語	キムチ、カルビ、ユッケ、クッパ、ナムル、ピビンバ、テコンドー、オンドル

<和製英語とカタカナ英語>

和製英語とは、英語の単語を組み合わせるにより造られた日本語の言葉である。英語風に聞こえるが本来の英語にはない表現である。

カタカナ英語とは、英語の単語を日本人が発音しやすいように変形した言葉である。元の英語とは発音が違っているので英語圏の人には通じないことが多い。

<カタカナ英語が外国の人に通じない訳>

元の英語の発音と違っているから。「ホホワイト」と「white」では、似てるけど違う。

もとの言葉と意味が変化した言葉もあるから。「マンション」は、日本では通常、地上何階もある高級アパートの意味で使っている。しかし、英語の「mansion」は、ふつう富豪の住んでいる「大邸宅」のことである。

日本で作られた「和製英語」だから。例えば、「キャッチボール」「ジェットコースター」「サインペン」は英語風ではあるが、どれも本来の英語にはない言葉である。それぞれ英語では、「play catch」「roller coaster」「marker」と表現する。

外来語は英語だけだとは限らないから。身の回りの外来語のうち半分以上の言葉は英語由来(一説によると、およそ80%が英語由来)だが、ドイツ語由来だったり、フランス語由来だったり、いろいろな国から入ってきている。

<お茶>

外来語には含まれないが、「お茶」という言葉は、昔中国から入ってきたものである。世界中どの

国でも、お茶を表す言葉は中国語由来である。モンゴル(ツアイ)、韓国(チャ)、日本などは、中国広東語の「チャ」から、ドイツ(tee テー)、フランス(thé テ)、イギリス(tea ティー)では、中国福建語の「テ」から来ている。

<アラビア語>

われわれが親しんでいる星の名前の多くは、アラビア語が元となっている。また「アルコール、ソーダ、コーヒー」のように、西アジア(中東)や北アフリカのアラブ諸国で用いられ使われているアラビア語がオランダ語に取り入れられて、その後オランダから日本に入ってきたものもある。算数の時間に使っている「1、2、3・・・」という数字も、アラビア数字と呼ばれており、日本だけでなく世界中で使われている。

<外国で使われている日本語>

外来語の逆で、外国で使われている日本語もある。

「すし、すきやき、うどん、豆腐、俳句、落語、相撲、柔道、折り紙、着物、カラオケ・・・」

「すきやき(SUKIYAKI)」といった食べ物のすきやきを思い出すが、アメリカでは坂本九さんの「上を向いて歩こう」という曲も意味している。アメリカのレコード会社の社長が発売する際に、アメリカ人でも覚えやすいように曲名を「SUKIYAKI」に変えて売ったからである。

「SUKIYAKI」は売れに売れて、日本で生まれた曲でただ1つの売り上げ全米1位となった。

「もったいない(MOTTAINAI)」という言葉の世界に広めようという運動がある。

食べ物を残したり、まだ着られる服を粗末にしたり、電気をつけっぱなしにしたりという無駄をいさめたり、食べ物を作ってくれた人に感謝の気持ちをもつという「もったいない」の精神は日本独特のものなのだそうである。ノーベル平和賞受賞者のワンガリ・マータイさん(ケニア副環境相)は、日本のこの言葉を知って感銘を受け、世界中に広めようとしている。

<もし外来語が急に使えなくなったら？>

これまで日本になかった事柄などを表現するのに、外来語はとても便利である。もし、外来語が急に使えなくなったら、どうなるのか？

(例)「夏休みのラジオ体操」の「ラジオ」を、外来語を使わないで何と言いますか？

このような児童に問題を出してみると、日常生活で外来語を使わないことがいかに難しいかがよく理解できる。

実際に、日本では60年以上前、太平洋戦争の時に、敵の言葉である英語は使わないよう強制されたことがある。野球用語のカタカナ言葉も日本語に言い換えさせられた。「ストライク」を「よし一本」、「アウト」を「ひけ」、「プレイボール」は「試合始め」、「ゲームセット」は「試合終わり」・・・ジャイアンツ(巨人軍)のスタルヒン投手は、「須田博」と、名前まで変えさせられたという。

その他の野球用語

「ボール だめ」「タイム 停止」「三振 それまで」「ファウル 圏外」「バント 軽打」「ジャイアンツ 巨人軍」「大阪タイガース 阪神」・・・なぜか「選手 戦士」という変更もあった。

<もし外来語が増えすぎたら？>

便利な外来語も、たくさん使いすぎると、相手に物事をうまく伝えられなくなってしまうことがある。次のような問題を児童に出すとよい。

(例)「6年生と地域とのコラボレーションは、スケジュールがタイトだから、一旦プロジェクトをフリーズさせよう。」・・・意味はわかりますか？

この文を日本語でふつうに言えば、次のとおりより多くの人に意味が通じるようになる。

「6年生と地域との共同作業は日程がきついから、一旦計画を中止しよう。」

これからも外国との交流を続けていく限り、外国の文化とともに外来語は増えていくであろう。

児童には、日本人が昔から大切に使ってきた日本語を尊重しながら、必要に応じて、外来語をうまく使い分けていけるようになって欲しいものである。

< 外来語を話さないゲーム >

給食の時間などを利用してできる簡単なゲーム。クラスの実態に応じてやってみると面白い。ルールは次のとおり。
会話のときに外来語を使ってはいけない。
外来語を使ってしまったら、後でバツゲームあり。(あまり負担にならないものを) ずっと黙っているのは反則である。

【本題材に関連した英語表現】

< 発音 >

すっかり日本語にとけ込んでいるが元の英語と発音が違う言葉の例
「ケーキ (cake)」「ネーム (name)」「カレンダー (calendar)」「フットボール (football)」「オレンジ (orange)」「アドバイス (advice)」「アフリカ (africa)」「ウエスト (waist)」「ウォーター (water)」「ガール (girl)」

< より自然な会話にするために >

“Where are ~ from?” “From ~.” の他に次のような言葉を入れると、より自然な会話になる。

A : *Excuse me.* Where are ~ from?
B : *Uh,.....* From ~.
A : *Oh, from ~. Thank you.*
B : *You are welcome.*

【ワークシート等】

< ワークシートの扱い >

教師が質問した
「Where are “シュークリーム” from?」の答えを、ワークシートに記入する。
シュークリームの場合は、「フランス語」の四角の中に「シュークリーム」と書ければ正解となる。

シュークリーム

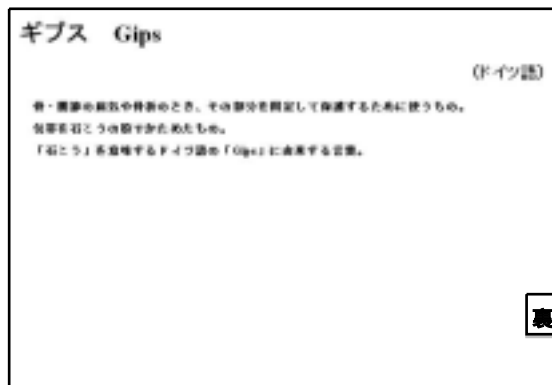


< 外来語カードの扱い >

コミュニケーション活動のときに使用する。全部で15種類(5カ国)あるが、児童数や扱える時間等に応じて、10~15問出題できるとよい。



表面



裏面